

優秀賞

母と生きる

青森県 藤崎町立明德中学校 二学年

佐藤 望愛留

今日も家中に家族の笑い声が響き渡る。三歳の妹はやんちゃ盛りでおとなしくしている事がない年頃だ。そんな騒がしさを学校から疲れて帰る私は時にうっとうしく感じる事もあった。妹はいつものように家中を走り回り、テーブルの上に置いてあった母の手帳に触れたのか、手帳が床に広がるように落ちていた。私がそれを拾い上げると、小さくたたまれていたメモが挟まっていた。私が書いた手紙だ。

「ずっとずっと大好き。いつまでも私達の成長をそばで見守ってください。」

忘れもしない去年の冬の事。

「ママ。ガンだって。」

毎日私達三兄弟を叱ったり、元気に仕事に出かけていた母を見ていた私にとって突然の宣告であった。

「ママ、死ぬの?」

やっと振り絞って出した言葉と共に私の目からは自然に涙が溢れた。母は、中学生である私に、これから乗り越えなければならぬ病気の事、その為には家族の協力が必要だという事を理解してほしいと静かに話した。CMでも流れているように将来二人に一人はガンになる時代だ。でもそれが何故私の母なのか、死んだらどうしよう、という悔しさと不安におそわれる日々が続いた。そんな私を見てなのか、母は決して涙を見せず、むしろいつもと何も変わらなかった。

手術は成功したが、それから長い抗ガン剤の治療が始まった。母は抗ガン剤の為に病院に行くのもやっとだったし、副作用に負けている母を見るのは辛かった。私は一度だけ病院に付き添った事がある。治療が終わり会計を待っていた時の事だったが、請求書の金額に思わず声を上げてしまった。三週間に一度のペースで高額なお金を払っている事を知らなかった。まして母は仕事ができる状態ではなく、ずっと休職している為、今まで聞いた事がなかったお金について聞いてみた。すると母は、

「社会人になって病気やケガをした時の為に保険に入っていたの。結婚して子供が生まれてから、自分に何かあった時みんなが困らないように保険内容も見直したの。その保険があるから今こうやって高い治療費も払う事ができているの。あなた達三人は生まれた時からこども保険にも入っているんだよ。」

第56回中学生作文コンクール

と教えてくれた。私自身今まで病気やケガをした事がなかったし、生まれた時から保険に入っている事もどれも保険という言葉も知らなかった。今回、母がこんな大きな病気になり、初めて保険の仕組みや、どれだけ私達の人生に必要なものか知るきっかけとなった。母が治療を行う事ができたのも、私達が変わらない生活を送る事ができるのも生命保険があつたからだ。ガン患者さんの中には高い治療費が払えず、抗ガン剤や放射線治療が受けられない人も聞いた。母は治療は辛いけれど抗ガン剤を中断せず、私達の為に生きる道を選択してくれた。これからは完治を目指し元気になる事が保険会社さんへの一番の恩返しであると私は思った。

看護師である母は言う。

「病気になって良かった。患者さんがこんなに苦しい思いをしている事、身をもって感じる事ができた。なつた人でないと分からない苦しみをこれから共感してあげられるんだ。いくらお金を払っても手に入れないものつてあるのよ。」

今、この作文を書いている私の隣には、お茶を飲みながらテレビを見て笑っている母がいる。

神様、私にはまだこの笑顔が必要です。

私が親孝行できるまで、どうか長生きをさせてくれませんか。

私の夢は母と生きる事です。